

人間主義史観への探究 その3

—紀元前3世紀ヨーロッパと仏教世界の交錯—

A New Approach to History of Humankind

—concerning the East-West Encountered in B. C. 3rd Century—

北 政 巳

Masami KITA

1. はじめに

人間主義史観への序走として、先ずヨーロッパ起源の学識体系の土台を形成した紀元前6世紀ヨーロッパ・ギリシア世界の宗教・哲学・倫理思潮生成を辿り、諸民族の回遊と混交から生まれた宗教観の形成過程を吟味した。つまりキリスト教・イスラム教誕生以前の紀元前6世紀頃、それは丁度、仏教が記録され後続の人類に思考・哲学メッセージの継承を可能とした時代であった。

そこで本稿では紀元前3世紀の世界に注目したい。釈迦によって紀元前6世紀に創始された仏教が、歴史的変遷の中で紀元前3世紀には大乘教として理論的な完成をみたが、背景には小乗教の限界を越える経済活動の活発化・商業活動の正当化を求める声があった。この変革は、宗教的次元では16世紀のヨーロッパのキリスト教宗教改革に匹敵する変化であったと云えよう。

その大乘教流布を例証するのがアショーカ大王の仏法帰依であり、広くインドからギリシア以遠の地域までも広がった。果たして大乘教がいかなるかたちでヨーロッパ世界に伝達したのかしなかったのか、また何故に容易にキリスト教化されたかに関心がある。(1)

興味あるのは、従来、ドイツ以北の北ヨーロッパの歴史を論理的に包摂した文献は極めて少なく、ましてロシア史はアジア史またヨーロッパ史の「交流史」からも孤立化してきたが、ヨーロッパ史とはギリシア・ローマ世界とキリスト教勢力の拡大過程とする歴史観が支配的だったからである。

そこで先ずキリスト教以前の人々の思考論理に目を向けるべきと考える。(2)

アプローチとしては、古代史研究家の山本和は「歴史成立の三つの不可欠として、その一は『記憶としての歴史』=『記憶』乃至『想起によって過去（人類史的）を、その時々『今』に現在化させる能力と努力のうちに歴史を成立させる萌芽、主要な発酵素である。これは歴史そのものへの理解と参与の原初形態である。その二は『物語としての歴史』=語られる言葉で再現、再演された過去の記憶であり神話物語・口碑・伝説ともなり、建国の大祖や英雄・偉人などの逸話とか伝説、民間説話、寓話、童話、おとぎ話等の考古学・歴史学・民俗学上の重要な諸概念を総称して名づけられる。その三は『記録としての歴史』=文字の発明によって『記憶としての歴史』が記述され残された。それは古代エジプトのパピルス文書『死海文書』等が起源とな

る。そして学問上、一般に『歴史』と云われるのは、この記録された歴史である」を用いたい。(3)

確かに現在の歴史学が方法論において、あまりにも第三の「記録としての歴史」に偏重と言われるが、ヨーロッパ語での『歴史』(ヒストリ)の語源が、ギリシア・ラテン語のヒストリアに溯り、伝記=物語、物語られた歴史を表す概念から派生した。

しかし現実には、歴史は現象の連続である。また歴史は時間枠での人間の基本的な実存形式の中で、あまりにも為政者・支配者・勝者の立場から諸個人・民族・人類の活動を記録したのが通常であった。だが本来、歴史の主役は庶民・大衆であるべきであり、現在のようない民主主義・人権擁護や生存権が認識されてきた現在、権力ではなく人間主義からの視点からの歴史観が容認・確立されるべきであり、同時に「現在から出発する人間の創造未来への人生観への指標」でなくてはならない。しかも「より良く生きるために」の価値基準が入るべきである。それ故に先述の三つの歴史を総合・再考化し、歴史学研究的の道標とすることが求められる。(4)

2. 紀元前3世紀のアジア・ヨーロッパ概観

紀元前6世紀のインド・アーリア語族の移動により、アジアとヨーロッパの民族的分離が始まった。哲学面から観ればインド・ヨーロッパ語族が各地に進出・定住し、種族の概念の上に民族を形成して地域土壌(郷)を作り、侵略・征服の繰り返しの歴史の中から、各民族文化の交流・包摂・混交を展開したが、それは同時に宗教観の混淆の歴史でもあった。

この過程の中で、インド・イラン高原がその分離帯としての役割を果たし、この自然・地勢的な分離が、ギリシア世界とペルシア・インド世界、西洋社会と東洋社会の成立に大きな意味をもたせた。

紀元前6世紀インドに生まれた仏教はギリシア思想の底流に流れ込み、またキリスト教やイスラム教教原理の基底部に大きな影響を与えた。従来、わが国ではシルクロードと仏法東漸が論じられたが、逆方向の西漸にも目を向けるべきと考える。また何故、仏教の影響力が西洋地域へ発揮できなかった理由にも関心がある。

松田壽男は「今日、学界で『西域』と呼ばれる東トルキスタン、とくに『天山南路』と称されたターリム盆地(東部天山地方をふくむ)をさすが、東トルキスタンの歴史は『歴史は発展する』というヨーロッパ的な歴史観だけでは、とうてい処理できない。また、その発展にも、単に『時間的』な点だけではなく、『空間的な発展』を考慮しなければならない」との考え方を示される。(5)

つまり西欧の歴史年代記のみの視角ではなく、むしろ東洋的な空間的な接触・交流の視角に関心を向けるべきである。

その意味では、やはり東洋から西洋に向かったシルク・ロードを研究してみる意義は大きい。アレクサンダー大王やダリウス王の時代には、ローマは東洋から持ち込んだ絹を等量の金と交換したエピソードがあるが、東西文明の大動脈を通り「陶器・紙・ガラス・葡萄酒・文様・動物・植物・仏教・回教・マニ教」等が伝わった。(6)

紀元前5世紀のヘロドトスは、アジアを横切る交易ルートが存在を指摘し「キャラバン

(隊商)はドン川河口のタメナスーカスピ海の北にあり、スキタイ人とサルマート人の境界一から始まる」と指摘する。(7)

そしてヨーロッパとアジアはウラル山脈を境界として区分された。古代チベットのボン教派の本に奇妙な図面が載っており未知の国々の名前がついた正方形や形のモザイク模様がある。この図形が四つの基本点一東は上、南は右、北は左に一を示しており、ソ連の言語学者でプロニスラフ・クズネツォフは、それが地図であると推論した。(8)

彼は手がかりを発見し紀元前7—4世紀の古代ペルシアの初期の首都パサルガクイアアレクサンドリア、エルサレム、バクトリア諸国(現在の北部アフガニスタン周辺)、バビロニア、北ペルシア、カスピ海のような場所をつきとめた。この発見はチベット人が数世紀も前に地理学的素養を持ち、またペルシアおよびエジプトとの繋がりを例証した。(9)

この地域は、砂漠ステップとオアシスの生活、移動的な生活と定着的な生活、遊牧と農耕の二つの相反する生活領域が交錯する地域でもあった。その意味では桜蘭(ローラン)が紀元330年に川の流れの変化から滅亡したように、地勢の変化が決定因となる地域であった。(10)

推測するに、このような地域に生きる人々にとって、ペルシア人(イラン人)の二元論的世界観をもつことが、最も生きていくのに妥当な思考となる。例え仏教の調和的な思想が流入したとしても、一部のオアシス社会のような受け止める客観条件が存在した地点では許容されたが、過酷な自然条件下にある大半の地域では拒絶された。加えて民族移動と興亡の連続の中で、社会的変転を激化させた。

それ故に同地の仏教遺跡を見ても、この自然・社会的影響が見られ「中央アジアのたぐさんのオアシスから仏教が消し去られたばかりでなく、文化の基盤であった拝火教もイスラムの教えにとって代われ、イラン系の西域人さえトルコ人の波のなかに沈んでいった」のである。(11)

以上のような変遷過程の中で、その地に住む人々が自らの風土と時代性に適合した宗教・思想を選択した。それ故にサマルカンド東のペンシケント市で発掘された『ダンダーン・ウィリーク出土の板絵』は「拝火教というよりはイラン化された仏教とみるほうが納得できる」とか『アールシイのショルチュックの遺跡』は「古代住民が拝火教かつ仏教を摂取していた」と云える。(12)

3. ゾロアスター教の誕生

このような問題意識にたち、仮説を設定したい。先ず仏教とゾロアスター教との関係、歴史上の謎とされる『バーミヤン大仏』や『グハラ』滅亡をどのように理解・把握するか、また仏教は消滅したのか、それとも存続しえたのか等の疑問である。

仏教とゾロアスター教の領域については、「アジアの記録係」と呼ばれた中国人も「ヨーロッパの記録係」と呼ばれたギリシア人も筆致の及ぶ分野ではなかった。しかし記録が乏しかったことは事実が小なかつた訳ではなく、むしろ余りにも多い事実から生じた混乱が記録意欲や論証努力に阻止的に働いたのかもしれない。

ゾロアスター教と仏教の関係について定説では「とくに東トルキスタンでは中央に大砂漠を横耐える関係もあって、北道と南道では

同じアーリア人でも差を見せたらしい。しかも周辺からの力やその働き方も作用して、文化の点にも多少の違いが認められた。もちろん大観すれば、トルキスタンの住民はイラン系独自の宗教体系であったゾロアスター教（拝火教）をもち、その上にインド伝来の仏教をとり入れてた」とする。(13)

また「ゾロアスター教は、古代ペルシア（現代のイラン）の民族的な宗教であって、世界で最も古い宗教の一つである。教祖の現れた年代は定かではないが、紀元前7世紀から6世紀にかけてであろうと見られている。イラン西北隅にあるレザイエ湖（別名ウルミア湖）の近くに生まれ、二七歳にして遁世、三〇歳でダーイテア河畔で天啓を受けた。彼の教説は、宇宙の本体は光と闇、善と悪、この二つの対立から成る。光と善の神アフラ・マズダ、闇と悪の神アンラ・マイニユ、この二つの対立から成る。…中略…そして善神の決定的勝利に至るまで戦っている。ゾロアスターの教説は紀元前のアケメネス帝国の後期に成立したものと考えられているが、アケメネス帝国およびそれに続くパルティア帝国時代には、その教徒についてはほとんど伝わっていない。この宗教をペルシアの国教として取り上げたのは、ササン朝になってからである」と述べる。(14)

さらに林良一は「ゾロアスター教はササン朝ペルシアの国教であり、民間では太陽神ミトラ信仰、泉と豊饒の女神アナヒータ信仰が盛んであった。…中略…イランのゾロアスター教の力では、ゾグディアでは仏教さえ受けつけなかった。玄奘がサマルカンドへ行った時、仏寺は二つあったが、誰も守ることがなかった」と述べる。(15)

ヘロドトスは「ペルシア人は、このアフラ・マズダの神の他に太陽（ミトラ）、月（マー）、大地（ザム）、火（アタル）、水（アバム・ナバト）、風（ヴァフェ）を礼拝していた」と書き残した。(16)

また彼は「アケネメス王朝でアフラ・マズダ、ミトラ、アナヒータの三神が尊宗されていた遠い原型は既にイランの先史から形をとっていたようであり、その王朝でやがてアルタクセルクセスII世の頃からのち、このアナヒータ女神の位置がますます重くなってきた」、また「天空を支配するものはアフラ・マズダの神であり、その天空にあって水を司るのがアナヒータであった…アナヒータが水の神として、生命と豊饒の神として一段と高い尊宗を得てゆくことが、イラン古代の民にとっては突然の成り行きではなからうか」と考えた。(17)

そこで仏教やゾロアスター教以前の同地域の宗教と社会構成に関心を向けてみたい。先ずイラン最古の文献『エラム文書』は、紀元前2500年にまで溯る。

4. イラン地域の原宗教観の形成

その頃エラム社会が作られ言語的にはインドのドラヴィタ族の中のタミール語を話す人種と共通項にあったが、北方系人種のインド・アーリア語人種とは異なっていた。足利亨の研究ではエラム社会では女子の活動を認め、男子と等しく女性の権利を尊重した。女子は文書を記し事務を処理し、家督相続をなし、遺言を認め、法廷にも出頭し、また奴隷も有した。王位継承は同母異父的性質、即ち王位継承権は女系により接受されたことを示す。兄弟間の婚姻は、一般的俗風であった。

アケメネス王朝のキロスの娘アトッサは、兄弟であるカムビセスやスメルゲスト、また親族であるダリウスI世とも結婚し、またアルタクセルクセスII世が自分の娘アトッサを娶って皇后とした、またアケメネス王朝の皇帝の婚姻に見るがごとき、またザラッシュトラ教中に奨められる近親結婚は本来はアーリア精神とは相容れないが、その起源は全くエラム的である」とある。(18)

このエラム社会は多神教であった。そこでは女神信仰は土俗信仰として広汎に存したと推され「殿堂遺跡は、今日も残存している」。そこでは「アンヒータの黄金像は『アルメニア』の光栄と生命、生命の授興者、一切智の母、全人類の恩人、偉大にして強大なるアラマズド（即ちアフラマズダ）の母」として崇められた。そこではミスラは、本来、死後の靈魂に対する審判官としての役目であったが、後のゾロアスター教のアヴェスタ教典では「光明・真実・信仰の神となった。

5. ミスラ教の形成と歴史的役割

このミスラについてE・ルナンは「三・四世紀の世界はキリスト教の生長がなければ、世界は挙げてミスラ教信者となったであろう」（『耶蘇伝』）と述べる。(19)

また足利は「古代世界の民衆生活の底流をなす土俗的思想、幾世紀にもわたる人類生活の『原始的天啓』の一つとして存在」と述べ、さらにミスラ教とマズダ教（ゾロアスター教に通じる）については「ミスラはザ・ラッシュトラ教に摂取せられたインド・イラーン系のヤザダの中で最も顕著な地位にある）、また「ミスラに最強の神であり、ミスラの賛美は最高神であり創造神であるアフラマズダの

命令であるとし、ザラッシュトラを此の命令の仲介者として示す」関係にあった。

他方、マズダ教に関係のない視点から観れば、「小アジアの配偶神信仰が遠くドラヴタ族のものと結びつくが、この神秘思想は同地方のミスラ信仰となった。ミスラ神秘思想はイラーンの信仰と配偶神的思想との合体」の形をとり、ミスラ神秘教のミスラはユダヤ教のミスラとは異なる形で成立した。(20)

そしてミスラ教は環境に従って漸次、異質的要素を内包し、時には他の宗教と合体して、内容的にも外観的にも多くの変化をきたし、定住とともに地縁宗教を形成してゆく。かくて全ヨーロッパを席卷した。事実、ネロはマギよりもミスラ教を受けたいと欲したと云われ、307年にジオクレチアはミスラを皇帝守護神とした。つまり「東洋の皇帝専制主義は、ミスラ教の媒介によって、共和主義的気質のあるローマ人の内面的抵抗を緩和し妥当せる存在基礎を興しえた」と評した。(21)

キリスト教前のミスラ教勢力は強大で、シュヴァイツェルも「その倫理的エネルギーをツアラストウストラの宗教から得ており、これは一断片であるが、一時は燃える彗星のようにギリシア・オリエントの世界を、またギリシア・ローマ世界を行きめぐるのである…中略…ギリシア・オリエントの世界に登場するのはキリスト教がすでに形成された後のことである。しかしながらまさに他ならぬ倫理的な理念エネルギーによって、ミトラ教はローマ人兵士たちによってゲルマニア、ガリア、アフリカへ運ばれ、しばらくの間キリスト教最強の競争者であった」と描写した。(22)

またヘニキア人は太陽崇拜の種族で、イザベル神もバアル神にも熱心な信者であった

のもキリスト教前の太陽崇拝の宗教とミスラ教の一致があると思われる。(23)

つまりミスラ教は、ゾロアスター教起源のミスラとして成立した。ゾロアスター教が善悪二元対立論でミスラを死後の審判としたのに対し、極めて調停役割を現世主義に持ち込み、融合的な考え方として再編して成立した。そこに古代社会の民衆の底流をなす土俗＝定着・定住の考え方があるが、その起源にドラヴィタ族に見られる非アーリア的世界の考え方が再生されたと看なせうる。しかも重要な点は、キリスト教前のヨーロッパ全域に流布した点である。

イエス・キリスト教の降誕も、足利氏によれば「福音書は、東方の博士（マギたち）が星の出現をみて、耶蘇基督の降誕を拝したことはマギ僧が奉仕者であり、そこにミスラ秘密教を護持していたカルディア、ペルシア見学と新興の宗教精神との合流を描写した」と述べる。(24)

つまりゾロアスター教は善悪二元論に固執してイランの民族宗教に留まったのに、ゾロアスター倫理の限界をミスラ倫理によって相克したミスラ教は包摂性から全ヨーロッパ宗教原理となり、諸民族の各地への定住・定着の中で土俗化した。このミスラ教の影響は逆に東洋にも流れ込み、ミロク・マイトーレ信仰の母胎となった。

6. ゾロアスター教と仏教

年代記では仏教開祖の釈迦は紀元前6世紀であるが、ゾロアスター教開祖は紀元前7世紀とされる。両派は源流で極めて近似する。特にウパニシャット哲学後期は、ジャイナ教、仏教、ゾロアスター教が挙って発生する宗教

萌芽期であり、年代的な判明も難しい。

むしろゾロアスター教の教義が、アケメネス朝時代とササン朝時代、その後、果たして同一であったかである。何故ならゾロアスターの時代のダリウス一世の政治が極めて寛容であり、一方ではゾロアスター教の影響を受けながらも、他方ではササン朝時代の極めて強権的なイラン国家宗教を固定化する動きをみると、同一であるかどうか疑念が生じるからである。

また仏教典の成立がジャイナ教の衰亡を見た釈迦時代から始まったとされるが、教典はゾロアスター教の「アヴェスタ」がずっと後代であり、小乗教成立の頃に編纂された。

これはイラン台地のような酷暑・荒涼の地域では哲学の体系的記述が自生的にされたかどうかは極めて疑問であり、むしろインドのような自然環境で思弁哲学が作られ用語の伝波の中で、その影響を受けイランのゾロアスター教も宗教法典を作成できたと観るのが妥当である。日本の正倉院にも、明らかな如くペルシア思想と仏教思想の交流が見られるのも周知の史実である。

そして仏教が「善悪不二」の立場で普遍的な哲学体系を作り上げたのに対して、ジャイナ教は「善悪相對」観から非アーリア優先の自己否定・消極的な民族宗教となり、またゾロアスター教は「善悪二元論」から非アーリア優先で自己肯定・積極的なイラン民族宗教となっていた。他方、ミスラ教は、ゾロアスター教の善悪二元論の「而二不二觀」を包合した仏教と異なり善悪を相克する「不二而二觀」として形成された。それ故に融合・妥協的性格が強く、ヨーロッパに流布した後、急速に各地で土俗化していった。

この点については藤縄は「ゾロアスター教に二元論は、定着と遊牧民の争いから生まれたものではないか」、「ギリシアの地にはペラスゴイその他の先住民の定住と侵入民の争いがあった」、「オリエントの農耕文化、エーゲ海の土着民は女性社会で、牧畜に重点を置くインド=ヨーロッパ語族は男性社会であった」と区分する。(25)

和辻哲郎は風土と宗教の関係に注目し、「砂漠では人格が唯一神の信仰が成立し、典型的なモンスーン地域では人は恵みに甘え多神教をつくりだす」と指摘した。(26)

さらに藤縄は「ギリシア神話は他国の神話とは異なって、政治権力や教团的立場による整理を受けていないので、まことに複雑・多彩である」と述べ、(27)この地域を神話の里とする。しかし注目すべきは彼等の異教徒の神への姿勢であり、同一視するのが常套的な態度であった。即ちエジプトの女神イシスをギリシア人はデメラル・オシリスをディオニソスと呼んで受容した。(28)

ギリシア人の宗教観は視覚・幾何学的ではあったが、果たしてキリスト教以前にはどうであったのかの疑問がある。そこで若しミトラ教が流布していき土俗化の過程で各地で再生・蘇生される宗教観とすれば一極めて原始的であるにせよ、類同性が見られる筈である。この鍵のひとつはギリシア神話にある。それは北欧神話についても同様であり、ギリシアでは神話を背景に紀元前六世紀にミレトスの手により、固有の哲学が萌芽した。

仏教は原始的な人間の信仰観から発生し、歴史的経験を経て普遍的な教義となった。また「人間の至高の哲学」として昇華しながらも、過酷な時代・風土環境に耐えられず後退

する場合もある。

つまりインドの民族宗教としてのジャイナ教と、イランの民族宗教としてのゾロアスター教と、それらを相克したミスラ教が派生した。紀元前の小乗教に限定すれば、仏教とジャイナ教の関係はミスラ教とゾロアスター教の関係に類似する。しかも、それらが全て哲学体系として記述されたのは、仏教の教典(小乗教の結集)以後であることを考慮すると、仏教の世界観が用語的に挿入され論理化されたと云えよう。その意味でも、仏教は世界宗教の「親」であり、その後の東洋の道教や西洋のキリスト教は、この哲学の外縁上に批判・摂取して成立した宗教である。

以上の関連から、仏教史上で謎とされる『バーミヤン大石仏』と『グハラ滅亡』の理解について触れておきたい。アフガニスタンの古代史をみると、紀元前6世紀、ダリウス大王のアケメネス朝ペルシア帝国の版図に入り、紀元前4世紀にアレクサンダー大王の遠征によりバルフを中心にバクトリア王朝がギリシア風の文化を築いた。その後紀元前3世紀にインドのマウリア王朝が南から侵入し、アショーカ王は仏教をもたらした。

そしてイスラム教の侵入を受ける7世紀までの間、仏教文化・ギリシア文化・ゾロアスター文化が互いに影響を与え合いながら、アフガニスタン独自の文化を育てた。その間、紀元2世紀になると、東北方の草原から遊牧民であった大月氏が侵入してクシャン王朝が興った。その領土もガンジス河流域にまで広がり、漢とローマの中間にあってシルクロードの中心地となり、バーミヤンの石仏も同時期に作られた。

興味深いのは仏教文化が栄えた都市の共通

点に、砂漠の中にあっても豊かな泉と緑に囲まれたオアシス地域が挙げられる。つまり風土としては、客体的に住み易い環境から生じる考え方は、調和・融合的な仏教思想に妙合した。特に砂漠地帯では、仏教都市のサマルカンド、ブハラ、タシケントの辿る歴史が、その人々の生活の変遷を物語る。

ブハラを見ると、「ブハル」はゾロアスター教の言葉で「学問の中心」を意味する語源とする説と、また仏教の「寺」を意味する梵語「ヴィハーラ」の訛とする説がある。語源的にもブハラの神秘性が伺われるが、旧ソ連邦の考古学者シュキンの発掘調査から、仏寺跡説が主流となった。即ちブハラのマガク・イ・アツタリ・モスク遺跡の調査から、仏寺の上にゾロアスター教の神殿が建立され、さらにイスラム教の礼拝堂になった史実が証明された。つまり此の寺院の遺跡が宗教史を説明する。また桑原隠蔵は、鑑真和尚に従い745年に我が国に来て唐招提寺建築に尽力した胡国僧の安如宝などもブハラ出身であったと究明した。(29)

通説では、この仏教の伝来は「1世紀から4世紀にかけてのクシャン（貴霜）王国の時代とされる。紀元前129年頃、漢の武帝の使者張…が此の地を訪れた頃に、月氏（または月支）族が同地方を支配したが、その頃には未だ仏教は入っていなかった」とされる。(30)その後、クシャナン朝（月氏族の一支流）のカニシカ大王が仏教の擁護者として2世紀初めに登場する。その中心地がブハラであった。ブハラの地は、玄奘三蔵が「捕喝」の漢字を充てて記録された。

このバクトリアの都については玄奘の記述が有名であるが、深田久弥はブハラの盛衰を

推論し「うわさのとおりバクトリアの城は実に素晴らしい豊かなオアシスで、伽藍も百もあり、僧侶は三千余人、その仏教の興隆のさまを彼は語っている。ここに仏教が伝来したのは紀元前3世紀の頃であった。土地豊饒、気候温和な地であったから古くから東西交渉上の屈指の要衝であった。アレクサンダーの東征以後バクトリア王国として栄えたが、その後もこもごも隣国の来たり冒すところとなったのは、物産の多いことと土着民の方弱なため」と述べる。(31)

このクシャナ朝の第III世カニシカ王（128-153年）の時代に、彼の所領北インド・中央アジアを占め、西は中国勢力と接する最盛期を迎える。この時代には『仏陀伝』を著述したアシュヴァゴーシャ（馬鳴）、インド最古の医学書『チャラカ・サンヒター』を著述したチャラカ、カニシカ王の詩を著したマートリチュータ、大乘教仏教理論を確立した仏教哲学者ナーガルジュナ（竜樹）などの文化人を輩出した。国王は篤く仏教に帰依した。

当時の信仰は仏塔の建立に主眼があった。王の庇護の下に第四回仏典結集を行い、その国威の伸展と歩を合わせて仏教も小乗教から大乘教に移行し、国際性に富む世界宗教としての道を歩み始める。殊に当初、西域南道へ向かって伸びた仏教の流れは、やがて中国に向かうことになる。

7. 仏像の誕生と仏教文化の興隆

当時のインドでは未だ仏像＝仏陀の像は人間的な姿ではなく、法輪とか菩提樹、仏足跡、仏塔などで象徴的に描かれたが、西方文化の侵入を受けて西方の神像等の影響を受ける。当時の天人像として、ディオニソス像、有翼

女神ニケ像等が発掘された。その後、次第に人間的容姿が描かれ彫り込まれ、礼拝の対象として形づくられた。これは「仏教がインドに生まれて伝播する間に、彼の土地の風土・文化、そしてそこに生きる人、民族によって、それぞれ違って受け取られ方をした。仏像も制作し人達、民族によってずいぶん違ったものになってくる」と述べる。(32)

そこにバーミアンの大石仏が登場する。1300年前、中国の長安から遙々、此の地に入った玄奘三蔵法師が「梵衝那国（バーミアン）は東西二千余里、南北三百余里で、雪山の中にある。人は山や谷を利用し、その地勢のままに住居している。国の大都城は崖に掘り谷に跨がっている。長さは六、七里あり、北は高い岩山を背にしている。…伽藍は数十箇所、僧徒は数千人で小乗の説出世部を学習している。王城の東北の阿（くま）に立仏の石像の高さ百四、五十尺のものがある。金色にかがやき宝飾がきらきらしている。東に伽藍がある。この国の先の王が建てたものである。伽藍の東に鑰石（とうせき）の釈迦仏の立像の高さ百尺余のものがある。身を部分に分けて別に鑄造し、合わせて出来上がっている」と記録した。(33)

この世界最大の巨大な仏像の建立について、神坂吉雄は「当時、南のインドでは仏教の礼拝対象として塔と仏像があり、一方西方にはヘレニズム世界での巨像製作の習慣、ペルシアの摩崖石像の伝統があり、これらの東西文化の交流がバーミアンの断崖に、この大石仏を生み出した」とする。(34)

この地域はタシュケントの地名、タシュ（トルコ語で石）、ケント（ペルシア語で町）即ち「石の町」とあるように岩石地域にも近

かったことが挙げられよう。また西洋と東洋をつなぐ交通路にあった。深田は「イラン北東部の町メシェッドから国境山脈を越えてソ連領トルキスタンのアッシュハバートに出、メルヴ、ブハラ、サマルカンド、タシュケントに至るもの。アフガニスタンの北部の町マザール・イ・シャリフ（旧都バルク）から国境オクサス川の対岸テルメズに渡って、サニルアンド、タシュケントに至るもの。また東へ向かう道筋にはタシュケントからオユシを経てキジル川に沿って国境を越え、新疆省のカシュガールに至るもの。タシュケントからアルマ・フタを経てイリ川を溯り、新疆省のクルジャに至るもの」と述べる。(35)

以上の歴史から、仏教の発生から小乗教、さらに大乘教への変遷の目まぐるしいドラマがこの地で展開されたことは間違いない。

仏教哲学そのものが個人の安心立命に眼目があり社会体制確立には及ばず、結果的には衰微・消滅の道を辿る。ブハラやバーミアンのような砂漠のオアシス都市では平和と調和の倫理たる仏教が迎えられ一時的に華麗な仏教混淆の文化が創出された。例えばオアシス旧都市サマルガンの郊外にタクティ・ロスタム（ロスタムの王座）と呼ばれる旧跡があり、仏教ストウパ（仏塔）の変形としての仏教石窟寺院がある。

神坂は「この洞窟は直径およそ10メートル、天井の高さもおよそ10メートル、素晴らしい大白蓮華文様だ。正面には、やはり仏像を祭った窪み、仏跡がうかがわれる。…大きなストウパを持った此の石窟寺院は紀元四世紀から五世紀のもの」とされる。(36)

さらに「ストウパは円型の伏鉢がほぼ完全な形で残っている点ではアフガニスタンで

は珍しく仏塔、仏像をもった石窟寺院としてインド文化の流れを強く引いている。また先に見たように同窟の天井の建築様式に、西方ペルシアの影響も見られ、日本人の私達にはドーム天井の蓮華の文様が身近なものとして感ぜられる。私がターク・イ・フマタンで見たミトラ神の下の蓮華座とほぼ同じ時代の文様」と述べる。(37)

この「蓮華模様」は、上・下エジプトでは上(南)エジプトのワダス(蓮)一下(北)エジプトのパピルスとして珍重され、ロータスとパピルスが混合してロータスが主流となってギリシア、ローマへと展開してゆくことを説いている。その中に花と蕾を簡略化した花を釣鐘形にしたもの、花を上から見た形(菊花紋のような)のロゼットや葉など多様な展開を指摘する。これが古代オリエント、ギリシア、ローマへ、そしてさらに東方へも広く展開していくのである」とある。(38)

当時の世界では我々の想像以上に緊密な共通項を媒介とした。また当時のエジプトの「ネフェルテムの神は睡蓮の花に象徴される日の出の神として崇められ、のちの時代にはポルス(太陽神)その他いろいろな神と同一に見られる」とある。(39)

数千年前から蓮の花と太陽の宗教概念が結びつき、人々に受け入れられてきたことには驚きを禁じ得ない。

8. 結び—アレクサンダー大王とアシ ヨ—カ大王の役割—

古代世界は我々の感ずる時間速度は遙かな昔にもかかわらず、空間性においては極めて広範に現在でも存続する文化的脈絡を形成していた。その流れの中で、仏教、ゾロアスタ

一教、ジャイナ教、ミスラ教等の宗教融合文化の華が咲いた。仏教自体も小乗から大乘への移行期であり、竜樹の生涯に象徴されるような仏教独自の哲学の中に当時の多種多様な宗教哲理・風俗・文化を包摂した。それを通じてインド民族宗教としての仏教ではなく、多様な民族の「心」を普遍的に共和しゆく大乘仏教、つまり世界宗教としての原基形態を形成した。

そのプロセスを物語るのが、当時の人々の新文化創造への息吹を残すブハラやパーミアンの石仏である。インドに誕生した仏教が世界宗教に成長してゆく中で、根本的な人間主義を貫きながらも化儀として、その歴史過程を象徴する遺跡を残してゆく。それは人間の「歴史塔」であり、「歴史碑」である。

仏教史上、最も注目されるのがアレクサンダー大王であろう。彼はギリシア・ローマ世界との接点においても大事な人物である。アレクサンダーが小アジアのゴルディウムにおいてジュピターの神殿に入り「ギリシア神話のマイダス王の父を乗せたという車の輓の複雑な結び目」断ち切り—この結び目を解いた人がアジアの盟友になると云う予言の神託があった—、アジアの盟友となった。事実とはもかく物語の意図することに興味がある。つまりギリシアの王たるアレクサンダーがアジアの王となる正当化の為に作られた神話ではないだろうか。

かつてA・トインビー博士はアレクサンダーの文化的業績を「アレクサンダーはペグラムにギリシア植民地を作った。そしてギリシアの皇子の一人ヘルメウスは紀元一世紀にギリシアの支配が消滅してからも、なおその地方を治め続けた。ヘルメウスはヒンドウー

クシュの向こう側から来たクシャン族と姻戚関係を結んだと云われている。…中略…地中海沿岸と同じギリシア文明がここに育って長く残ったのは、この婚姻関係からであった」と述べた。

このヒンドークシュ山脈は古名をパロパミス（鷲の飛ぶよりも高い山の意）と呼ばれ、中央アジアとアフガニスタン平原を隔てる大きな障害であった。仏教が小乗教から大乘教へと推移し、西欧への道を迂回して中国へ向かう時に、やはり同山脈を越えてゆくことになる。またギリシア文明も同山脈を越えて流入し、そこに残続した。またアレクサンダーがインド各地、例えばスウート（ニーサ）にギリシア風俗が残存するのを見て驚いたとされるが、「アレクサンダー大王以前にギリシアの植民地が広がっていた」と推される。(40)

アレクサンダーは、ヌサで集団結婚を行い東西の人々の交流を図ったことでも有名で「東洋と西洋の融合がアレクサンダーの大理想であったが、この結婚式もその最も顕著な一例であった。彼自身はロクザヌと結婚していたが、第二の妻としてグリウスIII世の娘バルシーネ（スタテイラ）を娶り、部下のマケドニアの貴族八十名にペルシア、メディアの貴族の娘を与えた。その他に約一万人に及ぶ東洋人、西洋人との結合が認められた」とあるように、広範なインドとギリシアの交流が挙げられる。(41)

つまり一昔前には、オアシスのような調和・平和思想が棲息できる自然環境のみにしか残続できなかったが、この時代には仏教思想を掲げて環境を調和させていく人間群の努力が凝集し、ヘレニズム世界が土壌的に定着

し仏教を基調とした文化興隆が見られた。

このような歴史を背景にアショーカ王物語は誕生した。アショーカ大王（在位紀元前274-231）はマウリア朝の始祖チャンドラグプタの孫であり、同大王の東方領を継承したエレウコスの大使メガステネスとの書簡が残される。

アショーカ大王は仏教精神を永久に記録・流布を考え、石に法勅を刻み国内要地、即ち主要都市の近郊や交通の要地、宗教上の聖地等の人々の集まるところに大岩石を研磨した石柱を刻み建立した。

この法勅の石柱は、5世紀の法顕や7世紀前半の玄奘も見た記録を残している。現在の研究では4種類の法勅、①摩崖法勅あるいは14章法勅別刻、②小摩崖法勅、③石柱法勅、④小石柱法勅があり、しかも各地の放言を用いて綴られた記録がある。しかも特筆されるのは、大摩崖法勅第十三章に「ダルマ（法）の勝利」がギリシア国王のアンティオコス（紀元前261-241年）をはじめとする四人の国王、エジプト王プトレマイオス＝フィラデルフォス（紀元前285-147年）、マケドニア王アンティゴネ＝ゴナタス（紀元前276-239年）、キレーネ王マガス（紀元前258年没）、エピルス王アレクサンドゥロス（紀元前272-256年）あるいはコリント王アレクサンドゥロス（紀元前252-244年）と云われ、に及んだ。

つまり紀元前3世紀、インドからエジプト、ギリシアにいたる地域で仏教使節が公に派遣されダルマ（法）が確立された。このダルマは、社会制度・慣習・道徳・法律・義務・宗教・正義など極めて広い意味で用いられた。そこに個人としての信仰の枠を越えて、社会の倫理・原理に昇華した「社会に生きる仏

教」が見られた。また石柱法勅第六・七章に一切の宗派であり、その中に仏教、バラモン教、ジャイナ教、アージーヴィカ教と共に並べられ、宗教的寛容性も表明された。

仏教徒の伝承を辿っていくと、南方伝承の『マハー＝ヴァンサ』(セイロン大王統史)第12章の中に、アショーカ王が布教のために派遣した9人の人名、目的地、説いた教典が載っており、岸本裕『インド仏教と法華経』が紹介されている。(42)

また『ディーパ＝ヴァンサ』(セイロン島史)にも詳しく記される。またアショーカ大王の伝説が北伝説の一切有部の中で大きくクローズアップされた。参考として『アショーカ＝アグアダーナ』の伝記文学、その累系見本が漢訳された『阿育王伝』、『阿育王教』がある。これらは仏教の普遍性が、各地に浸透し諸文化を興隆させ土俗文化を形成していったのである。

注

- (1) 拙稿「新しい社会科学研究を求めて(1)―人間主義史観の提唱」(『創価経済論集』第33巻1・2合併号 2003年12月) 23-34頁、同「新しい社会科学研究を求めて(2)」(『創価経済論集』第33巻3・4合併号 2004年3月) 21-36頁参照。典型的なヨーロッパ史観は「ヨーロッパ文明は、ギリシア人、ローマ人、ユダヤ人の遺産である」(清水幾太郎監訳『ヨーロッパ文明史』クロード・デルマ著 白水社 1971年) 7頁。
- (2) 池田大作他『仏法・西と東』(東洋哲学研究所 昭和51年) 195頁以降参照。その他、八木誠一『仏教とキリスト教の接点』(法蔵館 昭和50年)、堀堅士『仏教とキリスト教』(第三文明社 昭和49年)、中村元選集第9巻『東西文化の交流』(昭和47年)が参考になる。
- (3) 山本和「歴史の成立と仕組み」(『歴史と終末』社会思想社 昭和45年) 29頁。時系列で因

果関係を導き歴史とする西欧的思考に対して、東洋的思考には因果関係のみならず横の関係である「縁」を入れて考慮する時空間的二元思考がある。その原点の差を相互に認識することも大事ではないだろうか。その源にして双方に関連するのがインド哲学である。渡辺重明訳『インドの哲学』(J・P・フレッシネ著 白水社)が参考となる。また現代の西欧思考の典型は、鎮目恭次訳『歴史における科学』(J・D・バナール著 みずず書房 1969年)参照。

- (4) 現在の歴史学研究での新分野の状況は、竹岡敬温『アナル学派と社会史―「新し歴史」に向かって―』(同文館 平成2年)や角山榮『生活史の発見―フィールドワークで見る世界―』(中央公論新社 2001年)参照。科学史からは、山田慶児編『人間学への試み』(筑摩書房 昭和48年)が興味深い問題提起をした。
- (5) 松田壽男「砂漠の文化―中央アジアと東西交渉―」(『シルクロード(1) 中国・ソ連・アフガニスタン』(山と溪谷社 昭和48年) IV頁。
- (6) 森豊『シルクロードの駱駝』(新人物往来社 昭和47年) 102頁、岩村豊『シルクロード東西文化の溶炉』(NHK ブックス 昭和45年) 76頁、岸本通夫『古代オリエン』(河出書房新社 昭和48年)参照。
- (7) 深田久彌『中央アジア探険史』(白水社 別巻 1971年) 17頁、伊瀬仙太郎『東西文化の交流』(清水弘文堂 昭和43年) 132頁、佐藤圭四郎『古代インド』(河出書房新社 昭和49年) 262-267頁。
- (8) 『バイカル・マガジン』(ソ連邦 1960年) 第3号 46頁。
- (9) 中岡雅夫訳『太古史の謎』(A・トーマス著 角川書店 昭和48年) 142頁、蒲生禮一『イラン史』(修道社 昭和47年) 33-55頁。
- (10) 岩村忍訳『さまよえる湖』(S・ヘディン著 角川書店 昭和48年) 212頁、前嶋信次『イスラム世界』(河出書房新社 昭和49年) 17, 88頁。
- (11) 松田壽男『シルクロード紀行』(毎日新聞社 昭和47年) 92頁。飯沼二郎はバクダッドでの通じて歴史の変遷を「動態的風土論」を着想する。つまり自空間の中で人間の宗教・価値観の変化していくことを指摘する。飯沼二郎『風土と歴史』(岩波新書 1970年) 1-10頁。
- (12) 松田壽男『砂漠の文化』(前掲書) 97, 120頁。

- 同『アジアの歴史—東西交渉からみた前近代の世界像』(日本放送協会編 昭和48年) 108-118頁。
- (13) 松田寿男『シルクロード(1)』(前掲書) 95頁。この時代を描いた本に、長沢和俊『張騫とシルクロード—東西文化の交流』(清水書院 昭和47年)がある。
- (14) 深田久弥『シルクロード』(角川書店 昭和47年) 206頁。松田・前掲書(アジアの歴史) 127-138頁。
- (15) 林良一『シルク・ロード』(美術出版社 昭和43年) 135-136頁。
- (16) 森豊『シルク・ロードの天使』(芙蓉書房 昭和47年) 262頁。
- (17) 前掲書 270-271頁。この原基とされたギリシア神話については、山室静『ギリシャ神話』(社会思想社 1963年)が参考となるが、それじたいが紀元前6世紀頃のインドからの影響で作品化されたと観ることもできる。
- (18) 足利亨『ペルシアの宗教思想』(国書刊行会 昭和40年) 8頁。
- (19) 荒井献『初期キリスト教史の諸問題』(新教出版社飯 1973年)の他、飯塚浩二『東洋史と西洋史のあいだ』(岩波書店 昭和47年) 108-113頁。『耶蘇伝』(E・ルナン著 昭和50年) 128頁。
- (20) 前掲書(耶蘇伝) 141頁。田川建三『原始キリスト教の一断面—福音文学の成立』(勁草書房 1968年) 45-48頁。
- (21) 同147頁。仏教の立場から包摂史観からキリスト教を見た場合、堀堅士『仏教とキリスト教』(第三文明社 1973年)が参考となる。
- (22) 鈴木俊郎訳『キリスト教と世界宗教』(M・ウェバー著 岩波文庫 昭和49年) 13-14頁。
- (23) 村岡花子訳『聖書物語』(V・ルーン著 角川文庫 1915年) 241頁。宗教の流布については、キリスト教と仏教の間には類似性が見られる。泉靖一編『人類と文明』(東京大学出版会 1972年)が参考となる。
- (24) 前掲書(足利訳) 153頁。前掲書(岸本通夫『古代オリエント』) 343頁。
- (25) 藤縄謙二『ギリシア神話の世界観』(新潮社 昭和40年) 165, 185頁。
- (26) 和辻哲郎『原始仏教の実践哲学』(和辻全集 5巻 岩波書店 昭和37年) 6頁。
- (27) 前掲書 8頁。中村元『インド思想とギリシア思想の交流』(春秋社 昭和34年) 34-36頁。
- (28) 藤縄謙三『ギリシア文化と日本文化—神話・歴史・風土—』(角川書店 昭和43年) 210頁。
- (29) 中村元『インドの思想史』(岩波書店 第2版 1968年) 17頁。また当時のプハラについては、前掲書(蒲生『イラン史』) 40, 71-80頁。
- (30) 前嶋信次『シルクロードの秘密国—プハラ—』(芙蓉書房 1970年) 24-25頁。中村元『東西文化の交流』(中村元選集決定版別巻5 春秋社 1998年) 57頁。
- (31) 深田久弥『中央アジア探検史』(白水社別館 1971年) 92頁。
- (32) 神坂吉雄『シルクロードの鹿—その謎を追って—』(新人物往来社 昭和48年) 87頁。中村元『ゴータマ・ブッタ』(春秋社 1958年) 46頁。
- (33) 玄奘・弁機『大東西域記』(646年)による。羽田亨『大唐西域記付考異索引』(京大文科大学叢書 昭和21年) 23頁。前嶋信次『玄奘三蔵』(岩波新書 1971年) 23頁。
- (34) 神坂・前掲書 143頁。
- (35) 深田・前掲書(『中央アジア探検史』) 215頁。
- (36) 同114頁。仏塔崇拜については、中村元他『世界思想教養辞典』(東京堂出版 1972年) 66, 68, 98, 247頁。
- (37) 同136頁。長谷川明『インド神話入門』(とんぼの本 新潮社 1987年) 23-26頁。
- (38) 森豊『シルクロード幻想—連文様の道—』(新人物往来社 昭和46年) 166頁。畠中光亨『インドの宮廷絵画』(京都書院 1994年) 16頁。
- (39) 同(『シルクロード幻想』) 166頁。上村勝彦『インド神話』(東京書籍 1981年) 85頁。
- (40) 深田・前掲書(『中央アジア探検史』) 45頁。
- (41) 前掲書 51頁。近藤治編『インド世界—その歴史と文化』(世界思想社 1984年) 88頁。
- (42) 岸本裕『インド仏教と法華経』(レグルス文庫 1974年) 150頁。坂本貞二他『インドの昔話』(上・下 春秋社 1983年) 132頁。